

心象の観点からみた日本語の構文法―語順、活用、自他、態について―

河原 修一

岡山理科大学教育学部中等教育学科

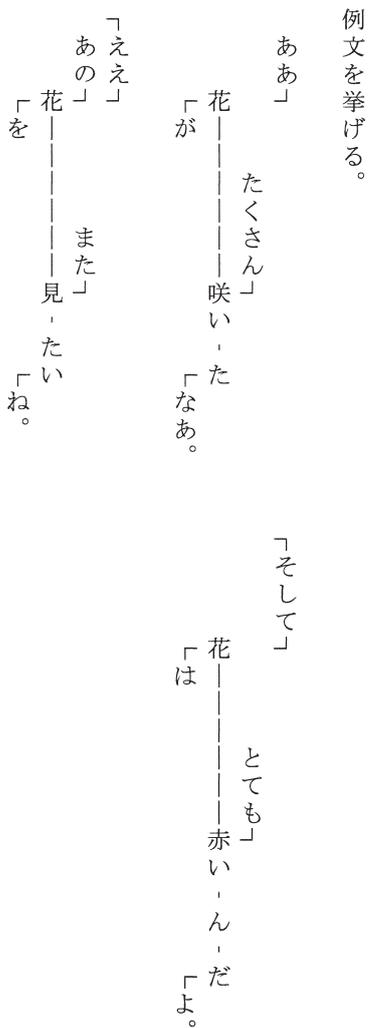
(二〇一七年一〇月二六日受付、二〇一七年二月四日受理)

二語以上文については、文を構える方法（枠組）としての構文法が関わる。構文法の基本として、語順、語と語の関係、題目、状況の局面（または段階）、状況への判断（または態度）などがある。

二語以上文における語順、語と概念との対応、語と語の関係を示す簡略な構文（枠組）について考える（注1）（〔図1〕参照）。語の意味を標示（固有名）と概念に分ける。概念を素材概念と関係概念に分ける。素材概念を基本概念（もの、こと、さま）（名詞、動詞、形容詞・形容動詞）と副用概念（派生概念、修飾概念）（感動詞、連体詞、副詞、接続詞）に分ける、関係概念を素材的関係概念（混成概念、準関係概念）（準体助詞、助動詞、助動詞的連語）と純粹関係概念（関係概念）（助詞）に分ける（注2）。副用概念のうち、表出的な感嘆、指示、呼びかけ、応答は、半独立的な成分である（場にに応じて、文として独立することもある）。（もの）に（関係を示す）助詞が後接して、（こと）（さま）の内容を補う補語となる。

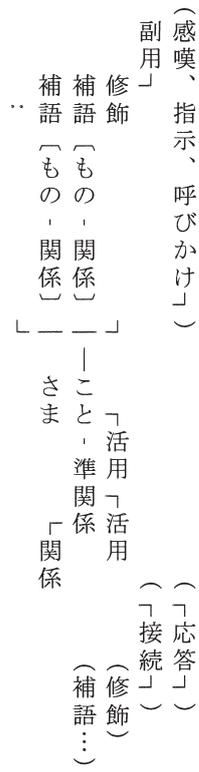
- （感嘆、指示、呼びかけ）
- 修飾」（「曲用）修飾」「活用」「活用」（「接続」）
- もの―――こと、準関係（もの…）
- 「関係」さま「関係
- 「補語」

〔図1〕



日本語は、述語（こと、さまを示す語）で文が終る述語構文である。様々な成分（補充成分、修飾成分）が述語に係る。補充成分を示す補語、

修飾成分を示す修飾語は、場に応じて順不同である（成分相互の語順の規定はない〔注3〕）。補語、修飾語がほぼ同格（同じ資格）で（順不同であるが語順には表象的意味がある）係ると、述語（動詞、形容詞・形容動詞）だけでは、バランスのうえで文を支えきれない。複合述語、派生述語を多用し、述語の後に準関係、関係を示す語が後接して、文を支える。併せて、態（ヴォイス）、相（アスペクト）、法性（モダリティ）、法（ムード）などを示す。〔図1〕を發展させて、図示する（〔図2〕参照）。



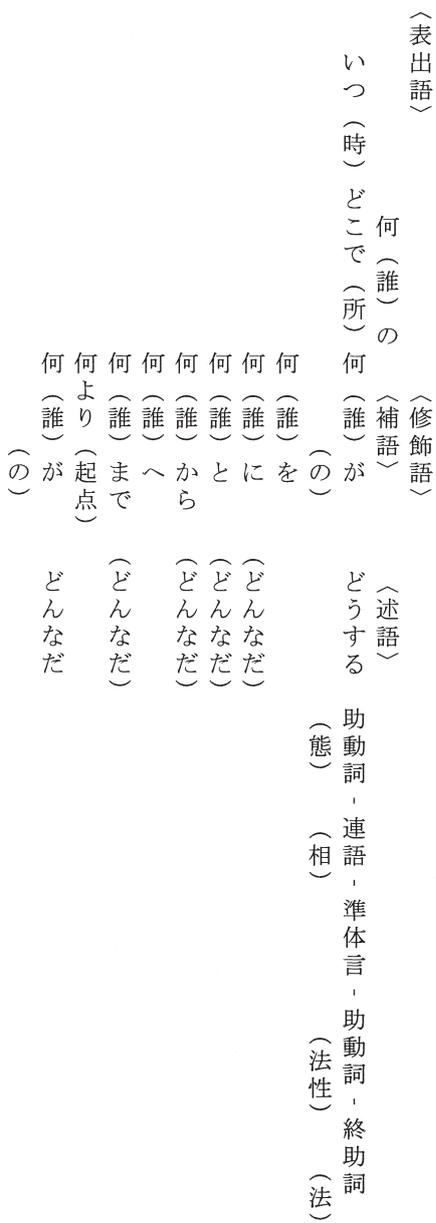
〔図2〕

例文を挙げる。

ほら、」 「おお、」

もう」 「稲穂が——吹か、れ、ている 雲も
風に」 「わ。 風で」 「どんだん——流さ、れ、はじめ、た
」 「ぞ。

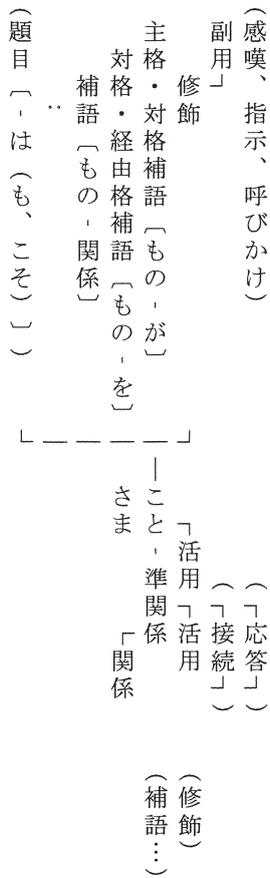
ただ、一般的には、状況の捉え方は（時・所・主体（人、物）・うごき（さま）・（おもい）〜という順序であり、基本的な語順となる（〔図3〕参照）。



〔図3〕

何より (比較)
 何だ
 何(誰)は どうする
 何(誰)には (どんなだ)
 何(誰)とは (どんなだ)
 何(誰)からは (どんなだ)
 何(誰)へは (どんなだ)
 何(誰)までは (どんなだ)
 何では
 何(誰)は どんない
 何よりは

補語(「何(誰)が」「何(誰)を」「何(誰)に」など)は、体言相当語(名詞など)に格助詞が後接する。格助詞「が」「を」(連体修飾部のなかの格助詞「の(注4)」)は動詞にも形容詞・形容動詞にも接続する。格助詞「より」は、通時的には起点を示し、動詞に接続するが、近代以降、比較の基準を示し(注5)、形容詞・形容動詞に接続する(起点を示すときは格助詞「から」が用いられるようになる)。その他の格助詞は、動詞に接続するが、形容詞・形容動詞にはほとんど接続しない(「く」に等しい(同じだ)。「く」に等しい(同じだ)。「く」に強い(弱い)。「く」と等しい(同じだ)。「く」から遠い(近い)。「く」から忙しい(暇だ)。「く」まで遠い(近い)。「く」まで忙しい(暇だ)。「く」などの例外はある)。時を示す語、所を示す語、補語、(一部の)修飾語は、提題助詞(係助詞)「は」「が」などが添加されて、題目語となる。ただし、格助詞「が」「を」に提題助詞「は」「も」「こそ」が添加されるときは、「が」「を」は「は」「も」「こそ」に包摂される。談話語では、格助詞「が」「を」に対応する提題助詞「は」なしで、間(ま)が置かれ、直前の語が題目語であることを示す。補語はほぼ同格であるが、相対的に、主格・対格を示す「が」、対格・経由格を示す「を」の順に、それぞれつくる補語の重要度が高い。〔図2〕を發展させて、図示する(〔図4〕参照)。



〔図4〕

一般的な状況の捉え方はあるが、場にに応じて、印象的な心象のあらわれる順に、言語に表象される。

野原に木が立っている。
 木が野原に立っている。

前者の例では、表象者の心象にまず（野原）という全景が映じ、その全景のなかに「木」という点景が映じて、その印象順に言語に表象される。一般的な語順である。後者の例では、表象者の心象にまず（木）という点景が映じ（飛び込み）、ついでその点景を包む（野原）という全景が広がる。表象者のこころの枠組の背景に、その時点での無意識的な価値観（美意識、問題意識など）があると考えられる。論理的意味は同様でも、語順が違っていると、表象的（表現的）意味が異なる（注6）。

野原には木が立っている。

野原に木は立っている。

木は野原に立っている。

木が野原には立っている。

印象的な心象の順はそのままに、補語に提題助詞「は」を添加して（格助詞が包摂されて）、表象者が受容者（独言・内言・日記などでは表象者自身）に題目を示すことがある。ただ、第一、第三の例のように、題目語を文頭に置くのが、一般的である。第二、第四の例では、提題助詞「は」の区別（対比）の機能が際立ってくる（注7）。論理的意味は同様でも、語順だけでなく、題目語の有無によっても、表象的（表現的）意味が異なる。

朝、公園で、太郎が花子の娘に本をちよつと見せた。

題目のない文（題目を示さない文）である。無意識的には（心象としては）、あらゆる文に題目はある。

状況は、朝、公園で、太郎が花子の娘に本をちよつと見せた。

しいて題目を示せば、「状況は、……。」という文になるが、題目を示さなくても、表象者にも受容者（表象者自身であることもある）にも、暗黙のうちに了解されている。

「朝」「公園で」「太郎が」「花子の娘に」「本を」「ちよつと」という成分は、場に依じて、心象順に、それぞれ順不同で、文末の述部「見せた」（述語「見せ」）に係る。また、各成分のいずれにも、提題助詞「は」を添加して（格助詞「が」「を」は包摂されて）、直前の語が題目語であることを示せる。

朝は、公園で、太郎が花子の娘に本をちよつと見せた。（題目語「朝」）

朝、公園では、太郎が花子の娘に本をちよつと見せた。（題目語「公園で」）

朝、公園で、太郎が花子の娘に本をちよつと見せた。（題目語「太郎」）

朝、公園で、太郎が花子の娘には本をちよつと見せた。（題目語「花子の娘に」）

朝、公園で、太郎が花子の娘に本はちよつと見せた。（題目語「本」）

朝、公園で、太郎が花子の娘に本をちよつとは見せた。（題目語「ちよつと」）

題目のない文（題目を示さない文）では、話し手（表象者）は視野（内的視野を含む）のなかの様々なものごとに焦点をあてて（注目して）、

ものごとの関係を示して、叙述（描写）する。聞き手（受容者または表象者自身）は初めてものごとの関係を知る。題目のある文（題目を示す文）では、話し手（表象者）は様々なものごとのなかから題目を選んで、聞き手（受容者または表象者自身）に叙述（説明）する（表象者自身が納得する）。聞き手（受容者または表象者自身）は題目について知っている（わかっている）が、その内容は知らない（認識していない）。

ものごと（ひとを含む）の関係を示す「が」「の」「を」「に」などの格助詞は、〈もの〉と〈こと〉、〈もの〉と〈さま〉、〈もの〉と〈も〉とを結びつける近接的な機能を示す。

題目を示す「は」「も」「こそ」の提題助詞（古語では係助詞）は、それより以下に題目について叙述（説明）するから、文末まで（あるいは文を越えて）係る包括的な機能を示す（ただし、場に応じて、近接的な機能を示すこともある（注8））。提題助詞と格助詞を含む文（ハガ構文など）では、それぞれの機能の違いが明瞭になる。

象は歩く。

象は耳が動く。

象は大きい。

象は鼻が長い。

象はしっぽが小さい。

象はりんごが好きだ。

象はりんごを食べる。

象は木に近づく。

↓象は 歩く。

↓象は 耳が動く。

↓象は 大きい。

↓象は 鼻が長い。

↓象は しっぽが小さい。

↓象は りんごが好きだ。

↓象は りんごを食べる。

↓象は 木に近づく。

↓象は 〈耳が動く〉。

↓象は 〈鼻が長い〉。

↓象は 〈しっぽが小さい〉。

↓象は 〈りんごが好きだ〉。

↓象は 〈りんごを食べる〉。

↓象は 〈木に近づく〉。

「象は」で、話し手の聞き手に示したい題目は「象」であることがわかる。「象は」より以下は、「象」について述べる部分（述部）であることが知られる。つまり、題目部（題目語、提題助詞）と叙述部（述部）で構成されている。「は」は、通時的には切る働きがある（注9）。

第二、第四、第五、第六の文は、ハガ構文（第二の文は構文〈もの・こと〉文、第四、第五、第六の文は〈もの・さま〉文）である。第七、第八の文はハガ構文ではないが、構文〈もの・こと〉文である。

第二、第四、第五の文の「が」は、主格というよりも部分特定格（「動く」部分は「耳」、「長い」部分は「鼻」、「小さい」部分は「しっぽ」）の機能を示す。言い換えれば、「耳が」は「動く」の補語（補充成分を示す語）、「鼻が」は「長い」の補語、「しっぽが」は「小さい」の補語である。第六の文の「が」は、対格（「好き」なもの（対象）は「りんご」であること）の機能を示す。「りんごが」は、「好きだ」の補語である。第七の文の「を」は、対格（「食べる」もの（対象）は「りんご」であること）の機能を示す。「りんごを」は、「食べる」の補語である。第八の文の「に」は、心象としては点（位置格の機能）を示す。「木に」は、「近づく」の補語である。

この道はいつか来た道、

ああ、そうだよ、

あかしやの花が咲いている。

（北原白秋『この道』萩原昌好編（二〇一一）『日本語を味わう名詩入門7北原白秋』あすなる書房）

提題助詞「は」「この道」（話し手（表象者）の領分（眼前）にある道）が題目であることを示し、「は」より以下に題目について叙述するが、「……来た道、」という文末（体言止め）を越えて、幾つかの文に影響を及ぼしながら（「ああ、そうだよ、」は挿みこみ（挿入句）で

聞き手（表象者自身）の領分（記憶心象）での気づき、「……咲いてる。」まで係る。格助詞「が」は、「あかしやの花」と「咲い（てる）」とを強く結び付ける。「は」は時空間を越える包括的機能、「が」は場面における近接的機能を示す。

この道はあかしやの花が咲いている。

構文〈もの・〈もの・こと〉文（ハガ構文）に縮約される。

朝は光がある。 （↓朝は明るい。）

鳥が飛ぶ。

花を見る。

気持ちがいい。 （↓朝は快い。）

朝はさわやかだ。

「朝」を題目として、「朝」について叙述する（描写する、説明する）とき、叙述する部分に「が」「を」などの格助詞が用いられる。第一の文の「は」は話題（トピック）の題目（ポイント）を提示し、文末（「……ある。」）を越えて、第四の文の末尾（「……いい。」）まで係る（影響を及ぼす）。第五の文の「は」は主な話題としての主題（テーマ）の眼目（ポイント）として「朝」を提示し、「朝」について結論的に述べる。第一と第五の談話文章は、いわば帰納法による尾括型の構成になっている。第五の文を談話文章の冒頭に持つと、いわば演繹法による頭括型の構成になる。さらに、文章の末尾に、第五の文を結論として反復すれば、双括型の談話文章となる。談話や手紙、随筆などで、様々な型が用いられる（見られる）。

朝はさわやかだなあ。光があるよ。鳥が飛ぶよ。花を見る。木に寄りかかる。気持ちがいいぞ「わあ」。昼より涼しいぞ「わあ」。朝はさわやかだね。

双括型の構成による構文群を〔図5〕に示す。

□はどんなだ。〈全体の叙述（説明）〉

○が「どうする、」 「なあ。」

☆を「」 「よ。」

△に「」 「ね。」 〈聞き手に対する態度〉

◇が「」 「ぞ。」

◇より「」 「ぞ。」

□はどんなだ。〈全体の叙述（説明）〉

〔図5〕

双括型の構成による論理的な構文群を〔図6〕に示す。論文（論説的な文章）ではよく用いられる文章構成である。「だ」（常体）「である」（常体文章語）「です」（敬体）は、ここでは、判断して定める助動詞または助動詞的連語である（注10）。「はくである。」という文は、定

義にも用いられる論理的な文（命題を示す形式）である。

りんごは果物である。りんごが輝く。りんごは赤い。りんごが転がる。りんごは丸い。りんごを食べる。甘酸っぱい。りんごはおいしい。りんごは果物である。

□は○○だ。（仮説）

◇が」どうする。（描写）

☆を」どんなだ。（性状）

△に」

□は○○だ。（結論）

[図 6]

場のなかで、話し手がどのようにものごとを受け止め、聞き手に対して、どのような態度で臨み、働きかけているか、整理してみる。場のなかで、話し手が、ものごと（状況）と主体（自分）とが未分化のままに一体化して表出している（主客未分のままに直結して言語に表象している）場合（表出）がある。

場のなかで、話し手が、ものごと（状況）を認知し客体化して、自身の状況をも踏まえて、心情や意思、価値観（評価）などを叙述している場合（叙述）がある。叙述には、聞き手に対して、話し手が自分の感覚や心情に即して、ものごとを描写している場合（描写）と聞き手の立場に配慮して説明している場合（説明）がある。

表出から叙述への過渡的な形式、描写から説明への過渡的な形式もある。話し手が聞き手に対して、親近感か拒否感か、配慮があるかないかという心理的距離が、待遇表現と終助詞（「なあ」「よ」「ね」「わ」「ぞ」など）によって示される。法（ムード）と関わる。親近な関係では常語（常体）が用いられ、やや遠慮される相手には丁寧語（敬体）が用いられる。

項目に区分し、例文を挙げ、形式を示す。（例）の波線部は敬語（丁寧語）で、傍線部は終助詞である。

「表出 (例) わあ。やあ。ええ。いや。

雪……。花よ。花だ。咲いた。赤い。まだだ。

「表出的叙述 (例) 一人伊豆の旅に出てから四日目のことだった。

《～だ》
《～だ》
《～だ》

「叙述 (川端康成『伊豆の踊子』『現代日本文学大系 52 川端康成集 (一九七〇) 筑摩書房

「描写 (例) 赤い花がたくさん咲いた。

あの花がきれいだ。

「説明的描写 (例) 夾竹桃の花はたくさん咲く。

夾竹桃の花は赤い。

「描写 (例) 桜の花は日本人の美意識の象徴である。

《～がどうする。》
《～がどんなだ。》
《～はどうする。》
《～はどんなだ。》
《～は～である。》

(上代動詞「現(あ)る」連用形からラ変動詞「在(あ)り」が転成し、動詞「あく」から形容詞「あかし」が派生的に転成したと考えられる)、
 「u」(動詞終止形、形容詞連用形)が状況についての心象のまとまりを示し、「a」(四段動詞未然形)が想像心象を示す。

花さか…: 花さかゆ(咲かゆ、栄ゆ)。

花さかる(咲かる、盛る)。(↓花ざかり)

花さかす(咲かす)。(↓花さか(せ)じじい)

上古では、動詞未然形に音素「j」(「y」を含む接尾辞が添加して、無意識的心象を示す動詞(「さく・さかゆ」(なく・なかゆ)「みる・みゆ」(しのぶ・しのぼゆ)「きく・きかゆ・きこゆ」(おもふ・おもほゆ・おぼゆ)) (後二例では母音調和が影響する)を派生する。中古では、動詞未然形に音素「r」を含む接尾辞が添加して、自然的推移を示す動詞(「さく・さかる」(なく・なかる)「あがる」)を派生し、音素「s」を含む接尾辞が添加して、作動(行為)的因果関係を示す動詞(「さく・さかす」(なく・なかす)「みつ・みたす」(みる・みす))を派生する。音素「r」「s」の交替形(「なる・なす」「す・する」)「かる・かす」(うつる・うつす)「わたる・わたす」)による動詞が、それぞれ自然的推移と作動的因果関係を示す(注11)。音素「r」「s」の対応によって、様々な局面での自己(それ自体という「自」、それ自体の「こと」)を媒介する他の「もの」、それ自体の「こと」に関与する意思ある(作動する)「他」が相対的に示されるが、西洋語(英語)の自己が主体と客体(または対象)を示すこととは異なる。音素「j」(「y」)の機能は、一部残存しつつ、音素「r」の機能に交替し、吸収される。時代の変遷につれて、人々の意識は現実の人間関係を重視するようになり、音素「j」(「y」)の本来的機能は見失われていく。

〈自↓〉

散る。

花が散る。

死ぬ。

子供が死ぬ。

〈自↓もの↓〉

散らす。

風が花を散らす。

太郎が花を散らす。

死なす。

子供を死なせる。

病気が子供を死なせる。

親が子供を死なせる。

(花が「散る」という状態になる。)

(子供が「死ぬ」という状態になる。)

(風が花を「散る」という状態にする。)

(太郎が花を「散る」という状態にする。)

(親の行為が結果的に子供を「死ぬ」という状態にする。)

(病気が子供を「死ぬ」という状態にする。)

(親の不注意が子供を「死ぬ」という状態にする。)

自然現象(または運命)と人とは区別されない。

第一〜四の例では、それ自体の自然的推移としての「こと」が示される。第二、第四の例では、自然的推移の焦点が「が」で示される。第五〜十一例では、それ自体の作動が原因となつて起きる「こと」が示される。第六、第七、第十、第十一の例では、作動の焦点が「が」で、作動の媒介の焦点が「を」で示される。第九例では、親の自責の念がこめられている。形態的に紛らわしいが、態(ヴォイス)としての「使役」

ではない。

〈自↓もの↓〉

ふみかる。

花子が太郎から本を借りる。 (花子が〈本を借りる〉という状態になる。)

〈自↓もの↓他〉

ふみかす。

太郎が花子に本を貸す。 (太郎が花子を〈本を借りる〉という状態にする。)

第一、第二の例では、それ自体の自然的推移としての〈もの〉を媒介とする〈こと〉が示される。第二例では、自然的推移の焦点が「が」で、媒介の焦点が「を」で、自然的推移の起点が「から」で示される。第三、第四の例では、それ自体の作動が原因となつて起きる〈もの〉を媒介とする〈こと〉が示される。第四の例では、作動の焦点が「が」で、作動の媒介の焦点が「を」で、作動の到達点が「に」で示される。音素〔r〕〔s〕を含む接尾辞をさらに添加することによって、態(ヴォイス)(人間関係における(意思ある人の(うごき)に関わる)〈こと〉の捉え方(視点))を示すようになる。音素〔r〕〔s〕の対応は、自然的推移と作動的因果関係を示すので、日本語の態は西洋語(英語)の態とは異なる。

〈他↓自〉

太郎に行かれる。

〈間接受身〉 (迷惑)

息子に死なれる。

〈間接受身〉 (被害)

〈自↓他↓〉

次郎に行かせる。

〈使役〉

〈他↓もの↓自〉

太郎に花を散らされる。

〈受身〉

〈自↓他↓もの↓〉

次郎に花を散らさせる。

〈使役〉

〈自↓〉

本が借りられる。

〈自然可能〉

〈↓自↓もの↓〉

本を借りられる。

〈尊敬〉

第一〜五例では、心象としては点を示す「に」が、自分に関わる他者を示す。第六例では、自然的推移の焦点は「が」で、第七例では、自然的推移の媒介の焦点は「を」で示される。日本語の自他と態は、同じ音素〔r〕〔s〕を含む接尾辞が用いられるため、混同されやすい。現代語では、西洋語(英語)の翻訳語法によって、混淆しつつある。

中古では、心象のあらわれる順に、情緒を含蓄する和語を列挙し、表象者の意味を場の枠組（場面に対応する心理・文化の枠組）によって、受容者が了解する。印象的な心象が「飛石型」で言語に表象される（注12）。心象が並列または直列で並ぶ（言語表象は直列で並ぶ）とき、場に応じて、二つ以上の心象の関係は、同一、包摂、近接、共同、連動、相互依存、因果などである。情報の（受容・生成（加工）・伝達）という展開が心象の場を順次つくりだし、「つらら型」で言語に表象される（注13）。心象の連鎖に依拠してことばの表象が連鎖し、文（センテンス）としてまとまりをつけるとは限らない。いわば、文は文脈のなかに融合している。

ただ、後には、社会の複雑化に伴い、語順を整え、格助詞によって語と語の関係（ひとを含むものごとの関係）を明らかにし、題目（話題・主題の眼目）を提題助詞で示し、助動詞または助動詞的連語で状況の局面・段階を詳しく述べ、終助詞で表象者（話し手）の状況（事態、受容者（聞き手））への態度を示し、文としてまとまりをつけるようになる。

印象的な心象の順に（ハガ構文、分裂文などの省察という思考過程（思考心象の構成）を経たものは別として）ある語順が選ばれ、文を包摂することばの脈絡のなかで、心象の流れの節目（屈曲）を示すとき、副用語（感動詞、連体詞、副詞、接続詞）、関係語（助詞、助動詞、助動詞的連語）、活用形、日本語としての態（ヴォイス）、相（アスペクト）、法性（モダリティ）、法（ムード）が関わってくる。時は相によって間接的に示される。

ものごと（ひとを含む）の関係は、通時的には、語順、述語としての動詞（待遇動詞、授受動詞を含む）、一部の形容詞・形容動詞、態（ヴォイス）に関わる助動詞（「ゆ」「らゆ」「る」「らる」「す」「さす」「しむ」など）によって示せるが、社会（人間関係）の複雑化に伴い、格助詞によって明確に示すようになる。

- （自↓）
見ゆ。 星見ゆ。 （星が見える。）
（自↓もの↓）
見る。 星見る。 （星を見る。）
（太郎が星を見る。）
（自↓もの↓他）
見す。 星見す。 （星を見せる。）
（太郎が花子に星を見せる。）
（無意識的なもの↓自↓もの↓）
見らる。 星見らる。 （星が見られる。）
（花子さんが星を見られる。）
（他↓自↓もの↓）
（他↓もの↓自）
見せらる。 星見せらる。 （星を見せられる。）
（花子が太郎に星を見せられる。）
（自↓他↓もの↓）
見さす。 星見さす。 （星を見させる。）
（太郎が花子に星を見させる。）

古語では、音素の交替・添加による類縁的な動詞（態に関わる助動詞の添加された動詞を含む）だけで自他物（それ自体という（自）、それ自体の（こと）を媒介する他の（もの）、それ自体の（こと）に関与する意思ある（作動する）（他））の関係が示される。心象のなかに「こと」がたちあらわれる。場に応じて、意味が了解される。場面的な場と心理的な場が融合し、自然との一体感という文化的な場に支えられている。第一例は、（おのづから然る）自然として、夕暮れになって視野（視界）のなかにあらわれる。第二例は、（もの）を媒介とする（こと）を示す。第三例は、（もの）を媒介とし、（意思ある）ひと）を相手とする（こと）を示す。第四例は、無意識的な（霊的な）（もの）に影

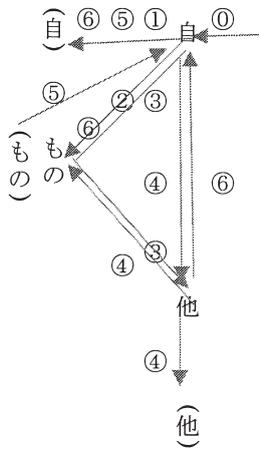
響される（こと）を示す。無意識的な可能（努力による可能ではない）として、晴れた夜の高原での（こと）を示す。無意識的な受身として、自分で大切に想っていた（もの）を誰かに見られる（こと）を示す。神々のように高貴な測りがたい（こと）を尊敬として示す。第五例は、第三例の枠組が第四例の枠組（のうちの受身の枠組）に入り込んでいる。第六例は、（もの）を媒介とする（意思ある）ひとの（こと）を強制的に勧誘する（こと）を示す。

現代語では、「意思あるひと」（もの）が明示され、格助詞が後置されることによって、自他物の関係が明確になる。第三例では、「太郎が花子に星を見せる。」と表象して、人物の意思を明示する。第四例では、「が」が後置されて、「られる」は自発、可能の意味になり、「を」が後置されて、「られる」は受身、尊敬の意味になる。さらに、「に」が後置されて、「られる」は受身の意味になる。

ものごとは自（それ自体）、もの（媒介するもの）、他（それ自体に対する他）をめぐり動きで示されるといふ本居春庭の仮説または問題提起（注14）がある。ただ、江戸時代には、「j」（「y」と「r」の機能は混濁し、「r」と「s」の対応も場に応じて様々なレベルでいわば便宜的に使用されていたので、分類が定まらない。刊本（最終案）の一部を紹介する（江戸時代には連体形終止が一般化している）。

第一段	おのづから然（しかる）	きこゆる	みゆる	おつる	にぐる
	みづから然する				（にぐる）
第二段	物を然する	きく	みる	おとす	にがす
	（他を然する）				（にがす）
第三段	他に然する	きかする	みする		かす
第四段	他に然さず	きこえさず			
第五段	おのづから然せらるゝ	きかるゝ	みらるゝ	にがさず	
第六段	他に然せらるゝ	きかるゝ	みらるゝ	にげらるゝ	
		きかるゝ	おとさるゝ	にがさるゝ	

一部修正して、簡略に図示する（「図7」参照）。①は訂正（追加）部分で、無意識による言語表象である。①〜⑥は、それぞれ第一〜六段に対応する。



〔図7〕

通時的には対応しきれないが、共時的に対応する。無意識的なもの（霊的なもの）は、「（もの）」と略記してある。補語を前置して、例を示す。

① 無意識

：星見ゆ。

- ① 自↓(自) …… 星見ゆ。 石落つ。 鳥逃ぐ。 人泣く。
 ② 自↓もの …… 星見る。 石落とす。 人泣かす。 人泣かす。
 ③ 自↓もの↓他 …… 星見す。 鳥逃がす。 人泣かす。 人泣かす。
 ④ 自↓他↓(他) …… 星見さす。 鳥逃がさす。 人泣かす。 人泣かす。
 ⑤ (もの) ↓自↓(自) …… 星見らる。 鳥逃げらる。 人泣かす。 人泣かす。
 ⑥ 他↓自↓(自) …… 星見させらる。 鳥逃げさせらる。 人泣かされる。 人泣かされる。
 他↓もの↓自 …… 石落とさる。 鳥逃がさる。

現代語では、格助詞を後置して、自他物の関係を明確にする。複雑な諸関係を論理的に区別して表す代りに、微妙なニュアンスは失われる。見かけの上では、動詞の形のもつ影響力が弱まる。

- ⑦ 無意識 …… 星が見える。 石が落ちる。 鳥が逃げる。 人が泣く。
 ⑧ 自↓(自) …… 星が見える。 石が落ちる。 鳥が逃げる。 人が泣く。
 ⑨ 自↓もの …… 星を見る。 石を落とす。 鳥を逃がさす。 人を泣かせる。
 ⑩ 自↓もの↓他 …… 星を人に見せる。 鳥を逃がさせる。 人を泣かせる。 人を泣かせる。
 ⑪ 自↓他↓(他) …… 星を人に見させる。 鳥に逃げられる。 人に泣かれる。
 ⑫ (もの) ↓自↓(自) …… 星が見られる。 鳥に逃げられる。 人に泣かれる。
 ⑬ 他↓自↓(自) …… 星を見られる。 鳥に逃げられる。 人に泣かれる。
 ⑭ 他↓もの↓自 …… 石を落とされる。 鳥を逃がされる。

古代では、尊敬されるべき貴族は都に少数いて、民衆は多数いる。敬意の心象における内的視点は、下から上へ向かう。協調という文化的な場が心理的な場として無意識に影響して、(多数の民衆の間では)話し手の聞き手への内的視点は、下から上へ向かう。協調という文化的な

- 見たまふ。 花を見たまふ。 (花子様が花をご覧になる。)
 見まゐらす。 花を見まゐらす。 (太郎が花を拝見する。)
 見ます。 花を見ます。 (次郎さん、花を見ますか。)

古語では、話し手(三郎)が話題(太郎)が花子を案内して花見に出かけたこと)のなかの人物(花子)に敬意を示すとき、三郎の心象のなかで、花子を下から上へという内的視線で眺める。身分の上下という文化の場に基づいて、心象世界のなかで、花子と太郎の関係では、花子の上に眺める。第一例は、三郎の花子への敬意を示すために、花子の上に眺めて、花子の(こと)を示す。第二例は、三郎の花子への敬意を示すために、太郎を花子より下に眺めて、太郎の(こと)を示す。話し手(三郎)が聞き手(次郎)に敬意を示すとき、三郎の心象のなかで、共同(仲間)における協調という文化的場が無意識に心理の場に影響して、次郎をやや下から上へという内的視線で眺める。第三例は、三郎の次

郎への敬意を示すために、次郎を自分（三郎）より上に眺めて、次郎の（こと）を示す。

たまふ。花をたまふ。（花子様が太郎に花をくださる。）
まゐらす。花をまゐらす。（太郎が花子様に花を差し上げる。）

古代では、身分の上下という文化の場に基づいて、もの（花）のやりとり（授受）が、話し手（三郎）の話題（太郎が花子を案内して花見に出かけたこと）のなかの人物（花子）に敬意を示しながら、ことばに表象される。第一例は、三郎の花子への敬意を示すために、花子と太郎の関係では花子を上に眺めて、花子の授ける（こと）を示す（注15）。第二例は、三郎の花子への敬意を示すために、花子と太郎の関係では太郎の下に眺めて、太郎の与える（差し上げる）（こと）を示す。

やる。花をやる。（自―もの↓他）（常語↓ぞんざい語）
あげる。花をあげる。（他↑もの―自）（謙譲語↓丁寧語↓常語）
さしあげる。花をさしあげる。（他↑もの―自）（謙譲語）
くれる。花をくれる。（他―もの↓自）（常語）
くださる。花をくださる。（他―もの↓自）（尊敬語）
もらう。花をもらう。（他―もの↓自）（常語）
いただく。花をいただく。（他―もの↓自）（謙譲語）

古語では、「やる」は（もの）を話し手の近いところから遠いところへ移動する（こと）（「物やる」「人やる」「心やる」など）であるが、現代語では「与える」という意味（ほかに「する」の意味の強め）で用いられる。

英語では、giveなどの語で示されるが、日本語では敬語動詞を含めて、場に応じて、七つの動詞（授受動詞）で示される。現代語では、授受動詞（授受敬語動詞を含む）だけで、（もの）のやりとり（やりもらい）の主体（自他）間の方向（矢印）、（こと）の主体（傍線部）、自他の待遇関係（上下）を明確にする。敬語動詞がなくても、授受の関係が待遇の関係となる。

日本人は、基本的に農耕を生活形式（注16）とする共同体で協調を重んじ、人間関係に気を遣う民族性によって、とりわけ（もの）のやりとり（授受）に神経質で、現代でも言動に示される。さらに、まつりごと（祭政一体）を起源とする待遇体系も加わって、文化の場が無意識に心理の場に影響する。

七つの例文に、それぞれ（もの）を媒介とする（こと）（行為）の主体（主格）、自他の上下関係、（もの）の動きの方向性が示してある。第一例は、話し手の心象のなかで、相手を上から下へ（あるいは同等に）という内的視線で眺める。第二例から第七例までは、いずれも話し手の心象のなかで、相手を下から上へという内的視線で眺める。日本語では、自他の関係において、行為主体（主格）に拘らず、（他）を重んじる特色が窺われる。

やる。見てやる。（自―恩恵↓他）（常語↓ぞんざい語）
あげる。見てあげる。（他↑恩恵―自）（謙譲語↓丁寧語↓常語）
さしあげる。見てさしあげる。（他↑恩恵―自）（謙譲語）
くれる。見てくれる。（他―恩恵↓自）（常語）
くださる。見てくださる。（他―恩恵↓自）（尊敬語）

花子さんが泣かれる。

〈意識を超えたもの↓自↓もの↓〉

花を見られる。(花子さんが。)

〈他(他者、自然現象)↓自↓もの、こと〉

花を見られる。(大切にしていた。)

出かけるの(「ところ」を見られる。)

風に吹かれる。

雨に降られる。

彼女に泣かれる。

恋人に逃げられる。

息子に死なれる。

〈尊敬〉

〈尊敬〉

〈受身〉

〈受身〉

〈自然と一体化した受身〉 (間接受身)

〈間接受身〉迷惑の受身

〈間接受身〉迷惑の受身

〈間接受身〉被害の受身

〈間接受身〉被害の受身

第一例は、場にに応じて、様々な意味(尊敬、受身)になる。第二例も、場にに応じて、様々な意味(自然可能、尊敬、受身)になる。古語(「泣かる」「見らる」)が担っていた本来的な無意識的自発の意味は、時代の変遷につれて失われ、現代語では、「(「つい」「なんとなく」などの修飾語を伴う)完了の形式などで示される。

第三、第四の例では、それ自体(星、花)がそれ自体によらないで、それ自体を含む状況を契機としてあらわれる(無意識的な状況が関わること)。「(「こと」)が示される。「が」は焦点を示す。

第五、第六の例では、民衆の意識を超えた高貴な存在が関わる(「こと」)が示される。「が」はものごとの起動の焦点、「を」は知覚の対象のなかの焦点を示す。

第七、第十三例では、人と自然を区別しない(「他」)が関わってもたらされる(「こと」)が示される。人も自然の一部として捉えられ、自然現象も人のように捉えられる。

第七、第八、第十一、第十二、第十三の例では、人為的な因果関係ではなく、状況という全体的な成りゆき(自然、運命)として捉えられる。第九例以下は、西洋語(英語など)には見られない自然と一体化した受身で、間接受身と呼ばれる。第九例は正(プラス)の方向で用いられる(「春の風に吹かれながら、散歩する。」「こともある。第十、第十三例は負(マイナス)の方向で用いられ、場にに応じて、迷惑、被害などの意味を示す。第十三例では、息子の死も、自然現象としての必然的な運命として、悲嘆のうちに諦念が示される。

農耕民族の生活形式による、人と自然現象を区別しない集合無意識的な考え方が窺われる。

自他における(「もの」)の媒介と、使役とは、形態的にも、通時的にも(活用の型の変化、西洋語(英語)の翻訳語法の影響、人々の意識の変化など)、紛らわしい(混淆する)ので、両方を示す。

〈自↓〉

泣く。(花子が。)

行く。(花子が。)

遊ぶ。(子供が。)

死ぬ。(子供が。)

〈自↓(もの↓)〉

帰る。(妻がどこかに。)

挨拶する。(人が誰かに)。
会う。(人が誰かに(と)々。)

〈自↓もの↓〉

泣かせる。(人が誰かを)。)

花子を泣かせる。(太郎が)。)

行かせる。(人が誰かを)。)

花子を行かせる。

遊ばせる。(人が誰かを)。)

子供を(公園で)遊ばせる。

息子を死なせる。

帰らせる。(人が誰かをどこかに)。)

妻を(実家に)帰らせる。

挨拶させる。

会わせる。(人が誰かを誰かに(と)々。)

〈授受〉

実家に帰らせて頂きます。

ひと言ご挨拶させて頂きます。

〈自↓もの↓他〉

花子に花を見せる。

〈影響〉 (起因)

〈影響〉 (起因)

〈影響〉 (起因)

〈許可〉 (信頼、自由放任)

〈影響〉 (起因)

〈自責〉 (起因)

〈影響〉 (起因)

〈許可〉 (自由放任)

〈影響〉 (起因)

〈影響〉 (起因)

〈他責〉 (起因)

〈許可〉 (信頼、自由放任)

〈許可〉 (信頼、自由放任)

〈許可〉 (信頼、自由放任)

〈影響〉 (起因、媒介、相手)

第一〜四の例は、それ自体のこと(うごき)を示す。第五〜七の例は、それ自体のこと(うごき)を示し、心象のなかの点(場所、人)をも示す。

第八〜十八の例は、もの(物、人)を媒介とするそれ自体のこと(うごき)を示す。それ自体が起因となって、ものに影響を及ぼす。

第九例では、太郎の行動や態度が原因となって、現代語では、翻訳語法によって、「物(ものごと)である(「映画が泣かせる。」)こともある。

第十一、十三、十五の例では、信頼または安全確認による許可(自由放任)を示す。

第十四例では、語り手(父親)の行動や態度が遠因となって、「息子が死ぬ。」という事態を招いたのではないかと自己責任の念が籠められている。農耕民族の生活形式による、共同体(ここでは家族)に対する自己責任という集合無意識的な考え方が窺われる。

第十九〜二十一の例は、敬語を伴う授受表現(第十九、第二十の例では自己責任と関係が交替する)である。第十九の例では、相手の行動や態度が遠因となって、こういう事態を招いたのではないかと自己責任の念がこめられている。謙譲(許可願)のかたちではあるが、裏返しに相手に要求するやや強引な自己主張が窺われ、脅迫に近い。第二十例では、会場全体の人々の意思(許可)による行動という心理が窺われる。集合無意識的には、共同体(世間)に対する(「お蔭様で」という)感謝の気持ちこめられる。

第二十二例は、もの(物、人)を媒介として、他者(「他」は意思ある人)に影響を及ぼすそれ自体のこと(うごき)を示す。

〈自↓他↓〉

行かせる。(人が誰かに。)
 花子に行かせる。(使役) (許容使役)
 帰らせる。(人が誰かにどこかに。)
 花子に(実家に)帰らせる。(使役) (許容使役)
 (自↓他↓もの↓)
 見させる。(人が誰かに何かを。)
 花を見させる。(花子に。)(使役) (許容使役)
 (使役) (許容使役)

第一く六の例は、(使役)を示す(古語では、身分の低い者に命じて、(こと)をなすから、尊敬を示すこともある)。いずれも、場に応じて、当事者の希望も勘案した選択的な許容使役を示すこともある。

「行かせる」「帰らせる」などの例では、格助詞「を」が前置されれば(許可)(自由放任)、格助詞「に」が前置されれば(使役)を示すから、現代語では格助詞の機能が構文法に関わる。

紙幅の都合で、相(アスペクト)、法性(モダリティ)、法(ムード)については、別稿に譲る。

注

(注1) 富士谷成章(一七七三)参照。富士谷成章(一七七三)は、(表出、指示、呼びかけ、応答、修飾、接続などを示す)感動詞・連体詞・副詞・接続詞などの副用語、接頭辞を「挿頭(かざし)」、体言(もの)を「名」、用言を「装(よそひ)」(そのうちの動詞を「事(こと)」)、形容詞・形容動詞などを「状(さま)」)、助詞・助動詞、接尾辞を「脚結(あゆひ)」として、文を人の姿(出で立ち)になぞらえる。

(注2) サビア(一九二一)参照。

(注3) 三上章(一九二八)参照。

(注4) 古語では、「が」「の」はいずれも主格、属格の機能がある(「の」は尊称、「が」は謙称に用いられる傾向がある)が、現代語では、「が」は主格(ほかに対格)、「の」は属格などのほかに、連体修飾部のなかでの主格の機能がある。

(注5) 英語の翻訳に際して、比較級を示す *than* の訳語として「より」が用いられ、日本語の表現にも採り入れられたと考えられる。夏目漱石『吾輩は猫である』(『現代日本文学大系17夏目漱石集(1)』(一九七〇)筑摩書房)の冒頭部分で、「吾輩は人間の不徳については是よりも数倍悲しむべき報道を耳にした事がある。」と書かれている。「於」の漢文訓読「ヨリ」の影響も考えられる。

(注6) 小松光三(一九九六)参照。

(注7) 限定の副助詞「だけ」の機能に近づく。逆に言えば、副助詞は提題の機能をもつ。寺村秀夫(一九八二)参照。

(注8) 「は」が区別(対比)の機能を示したり、「こそ」が逆接部分で用いられたりするとき、限定を示す副助詞の機能に近づく。

(注9) 「は」は切るもの(歯、刃)、切られるさま(端)を示す名詞から、文のなかで切るはたらきを示す助詞に転化したと考えられる。

(注10) 場に応じて、指定、主客一体(直結、截りとり、凝想)などの機能を示すこともある。

(注11) 池上嘉彦(一九八一)参照。

(注12) 河原修一(二〇〇一)参照。

(注13) 小松光三(一九九一)参照。

(注14) 本居春庭(一八二九)は、態に関わる助動詞を動詞の一部として、日本語(古語)の動詞を六種類に分類する。日本語では自他物の関係を動詞で示すとする卓見であるが、江戸時代の日本語は、古代語から近代語への過渡期にあり、場に応じたことばの慣用によって(論理のずれが生じ)、すでに論理的な整合性をもたなくなっている。

(注15) 大野晋ほか(一九七四)では、「たまひ」について、「目下の者の求める心と、目上の者の与えようという心とが合って、目上の者が目下の者へ物を与える意が原義。転じて、目上の者の好意に対する目下の者の感謝・敬意を表わす」と説明してある。

(注16) ヴイトゲンシュタイン(一九四五・一九四九)参照。

参考文献

- 1 富士谷成章(一七七三)『あゆひ抄』
- 2 中田祝夫、竹岡正夫(一九六〇)『あゆひ抄新注』風間書房
- 3 サピア(一九二一)『言語』泉井陽久之助訳(一九五七)紀伊國屋書店
- 4 三上章(一九二八)『現代語法序説』くろしお出版
- 5 小松光三(一九九六)『日本表現文法論』新典社
- 6 寺村秀夫(一九八二)『日本語のシンタクスと意味』くろしお出版
- 7 三上章(一九六〇)『象は鼻が長い』くろしお出版
- 8 池上嘉彦(一九八一)『「する」と「なる」の言語学』大修館書店
- 9 河原修一(二〇〇一)『内言に示される意味と枠組』表現研究74『言語表現学の基礎と応用』(二〇一三)清文堂
- 10 小松光三(一九九一)『国語の文の展開と情報生成―「つらら型」展開―』表現研究53『言語表現学の基礎と応用』(二〇一三)清文堂
- 11 本居春庭(一八二九)『詞通路(ことばのかよひぢ)』須受能耶藏板勢州松阪柏屋兵助(島田昌彦解説(一九七七)勉誠社文庫)
- 12 渡辺英二(一九九五)『春庭の語学研究』和泉書院
- 13 大野晋ほか(一九七四)『岩波古語辞典補訂版』岩波書店
- 14 ヴイトゲンシュタイン(一九四五・一九四九)『哲学探究』『ウイトゲンシュタイン全集8』大修館書店

JAPANESE SYNTAX THROUGH VIEWPOINT OF MENTAL IMAGERY; WORDS ORDER, CONJUGATION, VERBAL VIEWPOINTS, VOICE

Shuichi KAWAHARA

Department of Secondary Education,

Faculty of Education,

Okayama University of Science

1-1 Ridai-cho, Kita-ku, Okayama 700-0005, Japan

(Received October 26, 2017; accepted December 4, 2017)

Japanese words order of a sentence is basically like this; firstly half-independent phrase such as emotional or indicatory utterances, greetings, responses; secondly modifier; thirdly complements including theme phrase following middle particles regarding cases or theme; fourthly modifiers; fifthly predicative verb or adjective; sixthly auxiliary verbs regarding voice; seventhly collocations regarding aspect and modality; eighthly final particles regarding mood.

Japanese conjugation is concerned with stream of mental imagery; continuing or stopping.

Japanese verbal viewpoints depend on three elements; natural being itself, intermedium, corresponding being.

Japanese voice is various; unconscious, naturally potential, respectable, passive, naturally passive, annoyingly passive, damagingly passive, causative.